

カミュの『手帖』

松 本 陽 正

アルベール・カミュ (1913-1960) は 1935 年 5 月からその死の直前の 1959 年 12 月までの記録を 9 冊の大学ノートに残した。それらのノートは、3 つに分けて『手帖』というタイトルで上梓されている。すなわち、第一ノートから第三ノートまでは『手帖Ⅰ』として 1962 年に、第四ノートから第六ノートまでは『手帖Ⅱ』として 1964 年に、第七ノートから第九ノートまでは『手帖Ⅲ』として 1989 年にそれぞれ出版されている。また、それとは別にメモの取られた、1946 年 3 月から 5 月の北米旅行と 1949 年 6 月から 8 月にかけての南米旅行の記録は別途『旅日記』の題で 1978 年に公表されている。

『手帖』の特徴を一言で述べるのは困難だ。第七ノートまでは、いわゆる日記的側面が稀薄で、日付があまり付されておらず、創作ノート、思考の書きとめ、読書メモといったような趣がある。これらの点について、順次辿ってみよう。

創作ノートの側面を持つ『手帖』は、カミュの諸作品の形成過程を探るうえで欠かせないものとなっている。まず『異邦人』(1942)について 2~3 例をあげれば、1938 年 5 月、兄リュシアン¹⁾の妻の祖母の葬儀のために訪れたマランゴの養老院での出来事が詳細に記述されている (C1, pp.110-111 参照)。そして、1938 年 11 月末の「今日ママが死んだ」*«Aujourd'hui maman est morte.»* というあの冒頭部の、そっけなく映る複合過去による一人称の語りの発見 (C1, p.129 参照) が転換点となり、最初の草稿の完成が 1940 年 5 月だと知ることもしる (C1, p.215 参照)²⁾。『誤解』については逆に、老召使が口にする最後の台詞「いやです！」*«Non!»* の発見によって、構想がふくらみを見せ始めたことが『手帖』のメモを辿ることから推測可能となる³⁾。

『最初の人間』についても、タイトルの出現以前から、具体的には処女作『裏と表』の刊行前後からすでに、自己の幼年時代の虚構化を考え、構想していくようになった軌跡を実証することが可能だ⁴⁾。また、「ノート」とは別に記された『旅日記』はその性格上、日記的な色彩を帯びているが、南アメリカでの記述のいくつかは、ほぼそのままのかたちで『追放と王国』所収の「生い出ずる石」に活かされることになる⁵⁾。

逆に、創作メモが残されていない時期は、その作品の集中的な執筆時期と一致して

いることも見えてくる。これは『異邦人』の形成過程を追えば明らかになることだが、短期間に集中的に執筆された『転落』のメモが『手帖』にほとんど見受けられないのも、その好例となろう。

作家が自己の作品の最良の解説者だとは限らないが、『手帖』には自作についての貴重なコメントも残されている。たとえば、次の覚書は、作者自身による作品解説として『異邦人』を論じる際によく引き合いに出されるものだ。

この本の意味はまさに第一部と第二部の並行関係のなかにある。結論はこうだ。社会は母親の埋葬に際して涙を流す人たちを必要としている。あるいは、人は自分に罪があると思うことによっては決して罰せられない。他にも、さらに十くらいの結論が可能である。
(C2, p.30)

読書メモも多く残されている。たとえば、『ペスト』構想中の1942年初め、カミュはメルヴィルの『白鯨』の中で「象徴」の見られる箇所をメモに残している(C1, p.250 参照)。同じ1942年の『手帖』には、「目標にすべき外国作家」として、トルストイ、セルヴァンテスとともに、メルヴィルと『ペスト年代記』を書いたデフォの名前があげられている(C2, p.12 参照)。

また、1947年6月と推定される『手帖』には、サヴィンコフ『一テロリストの回想』の読書感想が次のように記されている。

テロリズム

キャリアエフのようなタイプのテロリストがもつ偉大な純粋さは、彼にとって、殺人が自殺と等しいことだ(サヴィンコフの『一テロリストの回想』を参照すること)。一つの生命は一つの生命によって支えられる。この論法は間違っているが(奪われる生命は差し出される生命と相殺できるものではない)、尊敬すべきところがある。今日では、殺人は代理人によって行われている。誰も支払いをしない。

キャリアエフがいた1905年は肉体の犠牲の時代であり、1930年は精神の犠牲の時代である。
(C2, p.199)

このように、『一テロリストの回想』に強烈な衝撃を受けたカミュはすぐさま作品化を思い立ち、メモに残す(C2, p.201 参照)。言うまでもなく、このメモが『正義の人々』(1949)の誕生を告げるものとなる。

もちろん、個人的な思いが吐露されている記述がないわけではない。1951年末か1952年初めと推定される第七ノートにある覚書は、死刑執行の悪夢にカミュ自身がうなされていたことを証するものとして、きわめて重要なものである。長い断章なので、

冒頭部のみあげておく。

午前二時。何年も前からよく見る夢が二つある。その一つは、現れ方はさまざまなのだが、きまって処刑の夢だ。今晚、目が覚めて飛び起きたとき、細部をたくさんメモすることができた。

ぼくは刑場に向かって歩いている。[...] (C3, p.35) ⑥

このように『手帖』は創作ノート、思考の書きとめ、読書メモといったさまざまな特徴があるが、第八ノート(1954年8月から1958年7月)からは様相が一変する。もちろん、創作ノートとしての機能も保たれていて、『最初の人間』や『追放と王国』のメモも残されてはいるが、第八ノート以降、日付が付された断章が急増し、個人的な日記の色彩が強まってくる。1954年8月20日の断章と1958年7月21日の断章とをあげておく。

20日

手紙を書く。一日無駄に過ごす。 (C3, p.123)

7月21日

独りで一日中考え込んだ。夕方、B.Mと夕食。ぼくの中でMが占めていた場所にぽっかり穴があいて、それがぼくを一日中苦しめた。彼女に手紙を書く。

(C3, p.249)

なぜこんなふうになったのか、その理由も述べられている。次の断章も1958年のものだ。

8月2日

ぼくは無理をしてこの日記を書いている。しかし、嫌悪感が強い。どうして今まで日記をつけなかったのかが、今にしてわかる。生は秘密なのだ。生は他者にたいして秘密なのだ(このことはXをひどく苦しめた)。しかし生はまた、ぼく自身の目にたいしても秘密でなければならない。ぼくはそれを言葉に表してはならないのだ。ぼくにとって生が豊かになるのは、内にこもって、形を与えられないときなのだ。今、ぼくが日記をつけようとしているのは、自分の記憶の欠落でパニック状態になっているからだ。 (C3, pp.252-253) (強調引用者)

想像されていた以上に、カミュの精神状態が、この時期、悪化していたことがわか

る。

ところで、この引用にある「X」は、大久保敏彦氏も指摘するように⁷⁾、妻フランシーヌを指していると考えて間違いない。プライバシーをおもんばかった匿名の記述は第七ノートまでにもなくはなかったが、日記的な側面の強まる第八ノート以降は、特定化回避のため匿名で処理されている記述が目立つようになる。妻フランシーヌや恋人たちだけではない。明らかに最初の妻シモーヌを指すものもある。とりわけ、『手帖Ⅲ』の最後の断章には、シモーヌへの痛々しいまでの生々しい思いがしたためられており、そのような思いを生涯引きずっていたことが看取されるのである。妻フランシーヌが生前、『手帖Ⅲ』の刊行に同意しなかったのも首肯される。

このように、『手帖』はカミュの作品の形成過程やあるいはカミュ自身の内面を覗くまたとない資料だが、問題がないわけではない。それについて、以下まとめておこう。

カミュは生前、『手帖』の出版に同意し、第七ノート（1951年3月から1954年7月まで）までをタイプ化させている⁸⁾。タイプ化された原稿をカミュがキーヨに渡したのは、1954年である（*JV*, p.7 参照）。タイプ化させるにあたって、カミュがノートを読み返したのは間違いなからう。その時期は1953年と推定される⁹⁾。

私的なノートのカミュはそのまま公開しようとはしなかった。ロットマンが指摘するように¹⁰⁾、とりわけ第一ノートの配列は大幅に変えられている。これは筆者自身、2002年にエクス＝アン＝プロヴァンスの「アルベール・カミュ資料センター」で思いがけず第一ノートの直筆原稿を目にする機会を得、確認したことだが、第一ノートの冒頭を飾る、創作への決意を記した有名な長い断章は、オリジナルノートの冒頭にはなかったと考えて間違いない¹¹⁾。『手帖』の出版に同意し、タイプ化させる前にカミュが配列を変更した結果、冒頭に据えられたものと考えられる。

出版されている『手帖』の冒頭部は実にかっこいいものだ。

35年5月

ぼくの言いたいこと。

誰でも — ロマンティズムからでなくても — 過ぎ去った貧乏な昔に郷愁を抱くことがある。何年間か惨めな暮らしを続けただけで、一つの感受性が形成されてしまうことがある。このような特別な場合には、息子が母親にたいして抱く奇妙な感情が彼のすべての感受性を形成する。[...]

後ろめたさには、告白が必要だ。作品は告白なのだ。ぼくは証言しなければならない。言わねばならぬこと、つぶさに検討しなければならないことは、ぼくには一つしかない。ぼくが人生の真の意味と思えるものに最も確かな手ざわりでふれたのは、あの貧しい生活の中で、つましい、見栄っ張りの人たちに囲まれているときだった。そこでは、芸術作品だけでは決して十分ではないだろう。ぼくに

とって、芸術はすべてではない。それはせいぜい一つの手段でなければならぬ。

(C1, pp.15-16)

『手帖』の最初のページにこのように作品創造への決意をしたため、そしてカミュは処女作『裏と表』の執筆へと向かっていったと考えられていたのだが、実はそうではなかった。後で配列が変更されていたのだった。

だが、なぜそのようなことをしたのだろうか？「源泉」となる『裏と表』— 厳密に言えば「肯定と否定との合間」— の着想と同時に『手帖』を付け始めたと思わそうとの作家の見栄なのだろうか？ それもあるかもしれない。だが、そればかりではあるまい。『手帖』出版を機に、その冒頭に「肯定と否定との合間」の構想メモを配することで、1953年にわき起こった¹²⁾、「源泉」への回帰の意思と決意とを刻印しようとしたのではないだろうか？ 「源泉」からの再出発の決心を自分自身のためにこのようなかたちで残そうとしたのではないだろうか？

配列変更について今一つ重要な点は、「性的嫉妬の物語」をめぐる作品の構想メモの配列変更であろう。『幸福な死』の構成プランが記された、1936年1月か2月と推定される箇所に「性的嫉妬。ザルツブルク。プラハ」(C1, p.24)という記述がある。また、その二つあとの断章、「六つの物語」のプランの一つにも「性的嫉妬の物語」がみつかる(C1, pp.25-26)。だが、実際にカミュが激しい性的嫉妬にとらわれたのは、1936年7月の中央ヨーロッパ旅行の折、ザルツブルクの局留め郵便で妻シモーヌの不倫を知ってからのことだ¹³⁾。したがって、ここでも配列変更がなされていると考えられる。なぜだろうか？ おそらくは、性的嫉妬の源に個人的な体験があることを隠蔽しようとしてのことであろう。『幸福な死』では、嫉妬の対象が妻ではなく恋人に移し変えられてはいるものの、この習作には主人公メルソーが愛人マルトに激しい性的嫉妬を覚える場面が残されている(MH, pp.53-54 参照)。『幸福な死』が失敗に終わり、生前出版されなかった理由はいくつかあるが、体験を十二分に昇華させぬままに作品化したこともその理由の一つであろう。以後、興味深いことに、カミュの作品からは性的嫉妬を覚える主人公は姿を消すこととなる¹⁴⁾。

配列変更だけではない。修正もなされている。現在出版されている『手帖』の1947年6月の箇所に次の記述がある。

明日がないこと。

第一の系列 — 不条理：『異邦人』— 『シーシュポスの神話』— 『カリギュラ』
と『誤解』

第二の系列 — 反抗：『ペスト』(補遺)— 『反抗的人間』— 『キャリアエフ』

第三の系列 — 『審判』— 『最初の人間』

第四の系列 — 引き裂かれた愛。『火刑』—『愛について』—『誘惑者』

第五の系列 — 『改められた創造』あるいは『体系』— 壮大な小説+大瞑想録
+上演不能の戯曲 (C2, p.201)

この断章は、現在・過去・未来の作品プランを系列に分類したものである。また、『最初の人間』のタイトルが『手帖』に初めて出てくるものとしても取りざたされてきた。

だが、ロットマンは、「第三の系列 — 『審判』—『最初の人間』」なる記述はオリジナル原稿にはなく、カミュが出版のために手を入れたときに付け加えられたもの、との重要な指摘をおこなった¹⁵⁾。

筆者自身、「アルベール・カミュ資料センター」で資料調査した結果、ロットマンの言うとおり、オリジナル原稿のこの断章には、「第三の系列 — 『審判』—『最初の人間』」なる記述がないことを確認した。後から書き加えられたものだったのだ。こうすることによって、実際の着想は1953年なのだが、1947年からすでに『最初の人間』というタイトルを思いついていたと思わせようとしたのだろう。

やはり、名声を得た作家が生前出版に同意した日記やノートや自伝は、眉に唾をつけて慎重に読みすすめなければならない。とはいえ、『手帖』は、手紙とともに、カミュとその作品を知るうえで第一級の資料であることに変わりはない。

ところで、昨春、カミュの新プレイヤッド版が上梓された。従来のプレイヤッド版はジャンル別の二巻本（『戯曲、物語、中編小説』と『エッセー』）で、そこには『手帖』は含まれてはいなかった。新プレイヤッド版は、編年体式に分けられ、全四巻の予定、出版されたのは内2巻(1948年まで)である。新プレイヤッド版には『手帖』も組み込まれているが、編年体式の新版にあっては例外的に、第二巻に第一ノートから第六ノートまでがまとめて収録されている。おそらく、四つに分けると使い勝手が悪いとの判断が働いたためであろう。ところが、先にコメントを添えた『手帖』の冒頭部は従来のままなのだ。『手帖』を担当されたレイモン・ゲイ＝クロジエ氏が、冒頭部の配列変更を承知していたのは間違いない。だが、第一ノートを完全に復元するのは不可能だったようだ¹⁶⁾。新プレイヤッド版に期待していた最大のものの一つただだけに、惜しまれる。惜しまれる点をもう一つあげれば、1947年6月の系列分類がそのままになっており、「第三の系列 — 『審判』—『最初の人間』」が残されている点だ。とはいえ、今しがた「完全に復元するのは」と記したように、本稿で取りあげた「性的嫉妬」についての二つの断章を含む、『幸福な死』に関する連続する三つの断章は、「しかるべき位置」¹⁷⁾ (1936年11月の日付の前)に戻されている。さらに、さほど数は多くなかったとはいえ、第六ノートまでにも匿名の記述（「X」）が散見されたが、刊行後40年余を経た今日、配慮する必要のなくなった人々については、オリジナル

原稿の記述に戻されたことも意義深い。今後刊行される新プレイヤッド版第三巻・第四巻で、第七ノート以降の匿名の記述がどれだけ明らかにされるか、興味深い。

最後にもう一つ。すでに述べたように『手帖』は『最初の人間』の形成過程を知るうえでも重要だが、1994年に出版されたカミュの遺稿『最初の人間』の構想メモは、『手帖』の他に「最初の人間（ノートとプラン）」と題された小さな手帖にも取られていた。『最初の人間』の出版によって明らかになった事柄だが、『最初の人間』だけにこのような小手帖があったのか、あるいは他の作品にもあるのだろうか？ 1952年12月、チパザを再訪したカミュは、『手帖』にはただ単に「チパザ。メモを参照のこと」(C3, p.69)と記すにとどめている。強い印象を受けたカミュは『手帖』(大学ノート)とは別のものにメモを残したのだろうか、それは単なるメモ用紙なのだろうか、あるいは『最初の人間』の場合のような小手帖なのだろうか？ そのような点も第三巻・第四巻で明らかにされることを期待している。

注

アルベール・カミュの諸作品を次のように略記し、ページは括弧内に直接示す。

II : *Œuvres complètes II 1944-1948*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2006.

C1 : *Carnets I mai 1935 – février 1942*, Gallimard, 1962.

C2 : *Carnets II janvier 1942 – mars 1951*, Gallimard, 1964.

C3 : *Carnets III mars 1951 – décembre 1959*, Gallimard, 1989.

JV : *Journaux de voyage*, Gallimard, 1978.

MH : *La Mort heureuse*, Gallimard, « Cahiers Albert Camus 1 », 1971.

なお、邦訳のあるものはそれを参照させていただいたこととお断りしておく。

- 1) Pierre-Georges Castex, *Albert Camus et « L'Étranger »*, José Corti, 1965, p.19 参照。
- 2) 『手帖』には「5月」としか記されてはいなかったが、オリヴィエ・トッドの浩瀚な伝記によって、「5月1日」だということが判明した。Olivier Todd, *Albert Camus une vie*, Gallimard, 1996, p.246 参照。なお、『異邦人』の形成過程については、拙稿、「『異邦人』の形成過程に関する一考察」、『広島大学文学部紀要』第60巻、2000、pp.239-256を参照されたい。
- 3) この点について詳しくは、拙稿「『誤解』の生成過程 — 二つの「新聞記事」との比較を通して —」、『広島大学フランス文学研究 9』、広島大学フランス文学研究会、1990、pp.24-26を参照されたい。
- 4) 拙稿、「*Le Premier Homme* の形成過程」、『広島大学フランス文学研究 16』、広

- 島大学フランス文学研究会、1997、pp.21-28 あるいは « *Le Premier homme : le processus d'élaboration* » in *Albert Camus 20*, Minard, 2004, pp.23-31 参照。
- 5) 拙稿、『『追放と王国』にみられる *Le Premier Homme* の影』、『広島大学フランス文学研究 15 』、広島大学フランス文学研究会、1996、pp.29-31 あるいは « *L'Ombre portée par Le Premier homme sur L'Exil et le royaume* » in *Albert Camus 20*, Minard, 2004, pp.94-97 参照。
 - 6) 死刑の強迫観念については、拙著、『アルベール・カミュの遺稿 *Le Premier Homme* 研究』、駿河台出版社、1999、pp.170-175 を参照されたい。
 - 7) 「訳注」、『カミュの手帖』、大久保敏彦訳、新潮社、1992、p.626 参照。
 - 8) *C3*, p.7 の「編者の注」参照。『手帖 1』の编者によれば、『手帖』のタイプ化は「1953 年まで」とのことであった。*C1*, p.7 参照。
 - 9) この点については、拙稿、「カミュのターニングポイント — 1953 年 40 歳 —」、『広島大学フランス文学研究 24 』、広島大学フランス文学研究会、2005、p.420 あるいは « *Année 1953 : le tournant décisif — Camus a quarante ans* », 『カミュ研究 7』、青山社、2006、p.76 を参照されたい。
 - 10) Herbert R. Lottman, *Albert Camus*, Traduit de l'américain par Marianne Véron, Seuil, 1978, p.99 参照。
 - 11) この点について詳しくは、拙稿、「カミュ研究の現況」、『広島大学フランス文学研究 21 』、広島大学フランス文学研究会、2002、pp.66-67 を参照されたい。
 - 12) 1953 年が節目の年となっている点については、注 9) にあげた拙稿を参照されたい。
 - 13) Herbert R. Lottman, *op.cit.*, p.128 参照。
 - 14) 名残のようなものを、『異邦人』の二義的な作中人物レイモン・サンテスに見ることが出来るかもしれない。
 - 15) « Plus tard, en remaniant son journal pour publication, Camus inséra une nouvelle série entre la seconde et la troisième : « Le jugement » et *Le Premier Homme*, donnant ainsi l'impression de les avoir prévus dès l'été 1947, alors qu'il s'agissait en vérité de conceptions ultérieures; » (Herbert R. Lottman, *op.cit.*, p.439.)
 - 16) « Un problème plus grave est causé par les coupures qui ne permettent pas d'identifier les pages manquantes (et perdues) au début du manuscrit du Cahier I. Il est impossible de savoir ce qu'elles contenaient. » (Raymond Gay-Crosier, « Note sur le texte » in *II*, p.1384.)
 - 17) *II*, p.1385.